OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	安大簡『詩経』を読むために : 『詩経』関連文献提要（一）
Author(s)	鳥羽, 加寿也
Citation	中国研究集刊. 2020, 66, p. 78-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76764
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　秦号（第六十六号）　令和二年八月　七八―八七頁

安大簡『詩経』を読むために
―『詩経』関連文献提要（一）―

鳥羽加寿也

本提要は、先秦期の貴重な『詩経』テキストである安大簡『詩経』の公開を受け、安大簡『詩経』自体の研究や、或いは『詩経』成立史の研究等を行う際に、参照価値の高いと思われる文献を紹介するものである。今回は、安大簡及び安大簡『詩経』それ自体について概説してから、特に『詩経』異文・三家詩・出土文献による『詩経』研究に関するものを紹介する。

安大簡及び安大簡『詩経』

安大簡とは、安徽大学蔵戦国竹簡の略称であり、二〇一五年の初めに安徽大学が入手した竹簡を指す。全体で一一六七枚の竹簡からなり、保存状態は良好である。発掘簡ではないものの、文字の風格や科学的測定から、戦国楚簡であると考えられている。

安大簡には、既に公開された『詩経』の他にも、楚国の歴史に関する文献、儒家文献を主とする諸子類文献、楚辞の逸篇とみられる文献、占いに関する文献が含まれており、今後の公開が待たれる。

安大簡全体の概要についての情報は、黄徳寛「安徽大学蔵戦国竹簡概述」（『文物』二〇一七年九月（総第七三六期）、文物出版社）及びその日本語訳（『中国研究集刊』第六十四号）を参照されたい。

安大簡『詩経』は、『詩経』の国風部分の一部（五十七篇）にあたる詩が書写されたものである。竹簡の下部にはもとから一～一一七までの番号が振られているが、現在は九十七枚のみが残る。

伝世『詩経』と比較すると、大量の異文の存在の他に、国風の順序に大きな違いが見られる。具体的には『毛詩』では周南・召南・邶・鄘・衛・王・鄭・斉・魏・唐・秦・陳・檜・曹・豳と排列されるのに対して、安大簡『詩経』は周南・召南・秦・（欠失）・侯・鄘・魏となっている。また、安大簡で「侯風」に含まれる詩は『毛詩』では魏風に属し、「魏」に含まれる詩は『毛詩』ではその多くが唐風に属す。そのほか、個別の詩篇内部においても、章の順序の入れ替わりがあるなど、興味深い現象がみられる。

本文献は現在のところ、『詩経』の最古の纏ったテキストであり、今後の

『詩経』テキストの成立及び伝承過程の研究に重要な資料を提供するものである。

なお、安大簡『詩経』は、『安徽大学蔵戦国竹簡（一）』（安徽大学漢字発展与応用研究中心編、黄徳寛・徐在国主編、中西書局、二〇一九年八月、全三三五頁、縦組繁体字）に収録されている。

『詩経』異文・三家詩

『金石簡帛詩経研究』（于茀著、北京大学出版社、二〇〇四年十月、全二四八頁、横組繁体字）

出土資料や石経を用いて詩経のテキストの異同を検討する研究書。出土青銅器の銘文、簡帛、漢石経の詩経テキストと、四家詩（毛詩・斉詩・魯詩・韓詩）のテキストとを全篇にわたって比較し、その異同に考察を加える上篇と、上博簡『孔子詩論』で、主に整理者が解釈していない、或いは誤った解釈を行っている箇所について考察と訂正を行っている下篇からなる。

上篇「金石簡帛与四家詩異文彙考」はただテキストの異同を指摘し、原釈を列挙するのではなく、テキストの異同が発生するに至った経緯や、該当箇所に対する文字学の面からの考察も網羅的に挙げられている。安大簡『詩経』を読む際には、この本を参照することにより、特定の詩の特定の箇所について、他のテキストのバリエーションを一度に確認することができるという点で参考となるであろう。

下篇「上海博物館藏戦国楚簡詩論考釈」は『孔子詩論』の字句の考察が主であるが、それのみに留まらず、その『詩』解釈と毛伝・鄭箋の解釈との比較検討を行う。筆者は多くの例において、『孔子詩論』の解釈は、毛伝・鄭箋の解釈よりも、詩の本義に近いと主張する。

本書の異文に関する記述は網羅的かつ整理されており、後述の阜陽漢簡『詩経』や石経といった断片的な資料を横断して参照する際に特に有用であるが、本書の完成（二〇〇二年）当時には、まだ上博簡第一分冊までしか公開されていなかったため、それ以降の新出土資料の情報は反映されていないことには注意を払う必要がある。

『先秦両漢典籍引《詩経》資料彙編』（何志華・陳雄根編著、中文大学出版社、二〇〇四年、全三一〇頁、横組繁体字）

先秦及び漢代に成立した伝世文献に見える、『詩経』の直接或いは間接的な引用を列挙した工具書。三〇五篇の他、逸詩も収める。

本書は、全篇にわたって『毛詩』のテキストの下に、それに相当する箇所の引用と出所を記すのみであり、テキストの異同に関する考察や、優劣の判定、系統に関する考察は一切行わない、純然たる工具書である。また、収録する範囲も、あくまで先秦及び漢代に成立したとされている伝世文献のみであり、二〇〇四年当時すでに公開されていた、郭店簡や阜陽漢簡、或いは石経などにおける詩の引用や異文には一切触れられていない。

本書において特筆すべきは、『詩経』の本文のみならず、詩序の引用或いは関連記述も収録されている点と、『詩経』からの引用か否かは定かではないが、それを彷彿とさせる例まで収録されている点であろう。例えば車攻に「弓矢既調」とあり、本書ではこれに関連して、『管子』形勢解の「調和其弓矢而堅守之」を引く。このような例は、デジタルデータによる文字検索で

発見することが難しいため、ここに本書の価値があるといえよう。

『商周逸詩輯考』（王輝斌著、黄山書社、二〇一二年八月、全四一二頁、横組簡体字）

商周代のものとされる逸詩を収集した研究書。

収録される詩の範囲は、出土品（銘文や竹簡）を含まず、伝世文献のみである。しかしながら、本書の「逸詩」の定義は、一般的な定義とは異なり、例えば『荀子』成相のような韻文や、「得人者興、失人者崩」といった有韻の諺言、さらには無韻の諺言をも含むものである。また、篇目のみ遺された逸詩も収録されている。

本書はそれらの「逸詩」を、時期によって殷商・西周・東周に分類し、それぞれの出処を明記する。また複数の出処があり、その間で字句が一致しない場合には校定を行い、さらにその「逸詩」の時代を判断する根拠を挙げる。

安大簡『詩経』の公開によって、これまでも『孔子詩論』や阜陽漢簡『詩経』によって進んできた『詩経』成立史の研究がさらに推進されることが予想される。その中で、孔子刪詩の有無やその具体的な方法についての議論は一つの大きな研究課題となるであろうが、本書は刪除された逸詩を論ずる上で大きな助けとなるものである。

『両漢三家詩研究』（趙茂林著、巴蜀書社、二〇〇六年十一月、全六五七頁、横組簡体字）

三家詩の研究史から各詩説の異同、その盛衰に至るまでを論じた、総合的な研究書。

「緒論」では、宋代から近現代までの三家詩研究を、重要書籍の提要を挙げつつ概説し、その特質を論じる。

第一章「三家《詩》淵源考論」では、テキストと詩説とを分けて考えるという方針に基づき、先秦の『詩』テキストの来源を史書の記述や出土資料の詩経引用部分との比較によって探り、詩説の来源を『孔子詩論』や『荀子』との関係をもとに考察する。

第二章「三家《詩》文本的面貌」では、三家詩の分巻や篇数といった書誌学的な問題に関して、毛詩と比較してどのような異同が存在したかについての考察が行われる。

第三章「三家《詩》説的特点」では、それぞれの詩説の基礎にある理論から、詩の背景や詩義そのものの解釈などについて、各家の特徴を考察する。

第四章「三家《詩》的知名学者及其著述」では、三家詩をそれぞれの開祖から受け継いだ学者たちを挙げ、その伝承過程を追う。また三家詩の序や、三家詩に関連する逸書について検討する。

第五章「三家《詩》的流変」では、三家詩が官学となり発展し、そして次第に毛詩によって駆逐され衰退する過程を概説し、その理由を探る。

安大簡『詩経』は、先秦時代の『詩経』の様子をそのまま伝える貴重な資料であり、これを利用することにより、『詩経』成立史研究の大きな進歩が期待される。その研究の過程では、『詩経』の成立史を網羅的に整理した本書は必読であろう。

『詩三家義集疏』（〔清〕王先謙撰、中華書局、一九八七年二月（一九一五年刊行）、上下冊全一一二五頁、縦組繁体字）

三家詩（斉詩・魯詩・韓詩）の逸文と遺説とを収集し、それに疏を付した書。本書は清代に至るまでの三家詩研究の集大成であり、三家詩についての情報、特に三家の詩理解の異同についての情報を得たい場合に基本となるものである。

本書の書式は以下の通りである。まず『詩経』の本文があり、その後に、各種典籍から網羅的に収集された三家詩の異文及び遺説が示される。続いて「疏」として、まず毛伝・鄭箋が引かれ、次に『説文』『爾雅』から清朝考証学者たちの説に至るまでの幅広い解釈の引用とともに、王先謙自身の判断が述べられている。引用が膨大かつ多岐にわたり、その間にも王氏の疏が挿入されるため、どの範囲が誰の意見であるのか一見して判別が難しい場合もあるので、参照の際には中華書局の点校本が有用である。

王氏の著作の主眼は三家詩にあり、毛伝の解釈を否定することが多い。しかしながら書中には馬瑞辰の『毛詩伝通釈』や陳奐の『詩毛氏伝疏』も引かれており、『毛詩』のみに基いて『詩経』を論ずる場合、或いは安大簡『詩経』のような、注を含まない本文のみのテキストを利用した研究を行う場合であっても、本書の参照価値は大きいであろう。

『韓詩外伝』

春秋戦国の故事を述べ、その末尾に故事と関連する詩句を引用するという形式をとる説話集。撰者は前漢の韓嬰とされる。『韓詩』に関する著作としては、『漢書』芸文志によれば、本書の他に『韓故』『韓内伝』『韓説』が存在したと記録されている。

本書の詩の引用は、所謂「断章取義」の傾向があり、詩の引用意図が、詩の本義とは大きく異なることや、同一の詩句が複数の箇所で、それぞれ異なる意図で引用されることがある。陳澧は、このような詩の引用方法について、『礼記』坊記・中庸・表記・緇衣・大学諸篇との類似を指摘し、「断章取義」は孔子門下の詩学の流儀であったと述べている。

本書は詩学の著作ではあるが、諸子文献からの引用もみられる。特に『荀子』からの引用が目立つことは、王応麟などが、韓詩を、荀子を祖とする詩学系統であると考える根拠となった。

また現行の『韓詩外伝』は完本ではなく、逸文が存在することが指摘されている。屈守元『韓詩外伝箋疏』（巴蜀書社、一九九六年三月、全一一五四頁、縦組繁体字）には、明清の逸文収集の成果が纏められているため、これを参照するのがよいであろう。

阜陽漢簡『詩経』

一九七七年に、安徽省の阜陽双古堆一号漢墓（前漢の第二代汝陰侯夏侯竈の墓）から出土した竹簡。夏侯竈の卒年が前一六五年（漢文帝十五年）であるため、それがこの竹簡の年代の下限となる。欠損が激しく、全部で百七十余りの断片から成る。国風と小雅にあたる部分が残っているが、檜風の簡は確認できず、また小雅も鹿鳴之什の一部のみが残る。また、『詩経』の本文の他に、詩序と思われる残簡もわずかながら含まれている。発見当時は現存する最古の『詩経』テキストであった。

本竹簡は一九八四年第八期の『文物』において、図版と釈文とが同時に公開された。

本竹簡のテキストは毛詩やその他三家詩と比較しても大きく異なるとはいえ、字の意味が変わるような異文は多くは無いため、詩義に大きな影響を与えるものではない。ただし用字の違いは認められるため、李学勤氏はこれを「楚国に伝わっていた（四家詩とは異なる）もう一種のテキスト」であるとし、整理者もこれに同意している。この指摘の是非や、楚国における『詩』の流伝については、安大簡『詩経』の発見により、今後さらに多くのことが明らかになるであろう。

出土文献による『詩経』研究

上博簡『孔子詩論』（『上海博物館蔵戦国楚竹書（一）』所収）

『上海博物館蔵戦国楚竹書』に含まれる、『詩』の論評集。完簡残簡合わせて計二十九枚の竹簡からなる。『孔子詩論』は整理者による命名。本文献と孔子を結びつけることを避けるために、『詩論』と称されることもある。

整理者はその内容から本文献を四部分に分け、第一部分を詩序、第二部分を頌・雅の論評、第三部分を国風の論評、第四部分を総論（単一の竹簡内に風・頌・雅の論評が共存する）と整理している。

第一部分は孔子による『詩』全体についての論評と、頌・大雅・国風それぞれについてのコメントからなる。

第二部分は、頌の清廟・烈文・昊天有成命、大雅の皇矣・大明、小雅の十月之交・雨無正・節南山・小旻・小苑・小弁・巧言・伐木・天保・祈父・黄鳥・菁菁者莪・棫樸者華にあたる詩の論評である。

第三部分は、国風の関雎・樛木・漢広・鵲巣・甘棠・緑衣・燕燕・東方未明・将仲子・揚之水にあたる詩と、今本『毛詩』未見の詩一篇についての評語である。

第四部分は風・頌・雅が混在している。ここでは木瓜・無将大車・杕杜（小雅）・湛露・宛丘・猗嗟・鳲鳩・文王・生民・鹿鳴・兎罝・蕩・兎爰・大田・柏舟（邶風）・谷風・蓼莪・隰有萇楚・蟋蟀・北風・青蠅・巻耳・裳裳にあたる詩と、今本『毛詩』未見の詩六篇が評されている。

本文献の『詩』理解及び各詩篇の順序は『毛詩』とは異なり、三家詩以前の先秦期の『詩』理解や、『詩』成立史を論ずる上で多大な影響を持つ資料である。後述の『楚簡与先秦《詩》学研究』や『孔子詩論研究』をはじめ、既に多くの研究が、本文献を基礎として行われている。

上博簡『采風曲目』『逸詩』（『上海博物館蔵戦国楚竹書（四）』所収）

『采風曲目』は、歌曲を分類した目録である。六枚の竹簡からなり、破損が激しい。その内容は、五声（宮角商徴羽）によって詩曲を分類し、その題名を列挙しているものである。ただし本文献においては、五声の内「角」の分類は見られない。

本文献に記録される詩曲の篇名は、僅かに「碩人」が『詩経』衛風の「碩人」と一致する可能性があるのみで、それを除けば全て現行の『詩経』に収録されていないものである。

本篇の文献的性質については、整理者はその内容から見て、当時音楽文化の盛んであった楚国において、楽官が民間の詩曲を収集する際に整理した目

録であろうとしている。元来『詩経』をはじめとした詩は歌唱されたものであり、その音楽も何らかの形で記録されていたが、『楽経』は焚書により失われた。こうして先秦の音楽に関する資料は多くが失われたが、本篇はその難を逃れた貴重な資料である。

『逸詩』は、整理者によって仮に『交交鳴鴈』『多薪』と名付けられた二篇の詩である。

『交交鳴鴈』は「君子」を褒め称える詩であり、三章構成で、一章は十句、一句は四字となっている。

『多薪』は兄弟の絆を詠う詩であり、残欠部分を除けば二章、一章は四句、一句はおおよそ四字となっている。

いずれの詩にも現存する『詩経』の詩と類似した修辞法が用いられており、元来は『詩経』の一部であったと思われるが、孔子による刪詩の結果削除されたものであろうと考えられている。

『阜陽漢簡詩経研究』（胡平生・韓自強編著、上海古籍出版社、一九八八年五月、全一一〇頁、縦組繁体字）

先に挙げた阜陽漢簡『詩経』の基礎的な研究書。編著者の胡平生氏及び韓自強氏は、阜陽漢簡『詩経』の整理者である。巻前には阜陽漢簡『詩経』の図版と模写が付属する。

内容は、まず「釈文」があり、続いて「簡論」では、『毛詩』と比較した場合の異文を挙げ、「音義相同或相近的異文」「意義可能不同的異文」「虚詞的異文」「今本『毛詩』或『阜詩』的錯字造成的異文」に分類する。

次に、以上の情報に基づき、阜陽漢簡『詩経』の系統と、詩篇の順序に関する考察を行う。著者は系統について、斉魯韓毛のいずれとも異なるとし、李学勤氏の「楚国に伝わっていた（四家詩とは異なる）もう一種のテキスト」であるという見解を支持する。順序に関しては、一部『毛詩』と異なる部分が存在することを指摘する。また、王先謙が『毛詩』における邶風・鄘風・衛風の分類を批判したことに対して、非『毛詩』系の阜陽漢簡『詩経』においても邶風が独立していることを以て反論する。

続く「阜陽漢簡《詩経》異文初探」では、「簡論」を受け、すべての異文について詳細な注を付ける。阜陽漢簡『詩経』を利用する際にはまずこの注を参照すべきであろう。

最後に竹簡の形制についての論考があり、巻末には、これにもとづいた阜陽漢簡『詩経』復元図が収録されている。

清華簡研究（第二緝）【清華簡与《詩経》研究】国際学術研討会論文集（清華大学出土文献研究与保護中心編、中西書局、二〇一五年八月、全三〇七頁、横組繁体字）

二〇一三年十一月に香港浸会大学で行われた国際学術会議の論文集。清華簡『周公之琴舞』『耆夜』『芮良夫毖』等の文献に現れる韻文に関する考察が多く載っている。

『周公之琴舞』に関しては、伝世『詩経』の閔予小子之什の詩を参考にその性質を論じた李学勤「読《周公之琴舞》小記」、詩における「乱」「乱曰」について考察した邱徳修「《周公之琴舞》簡『乱曰』新証」、原釈にいくつかの重要な訂正を加える季旭昇「《周公之琴舞》『周公作多士儆毖』小考」、古くは各国に様々な版本の『詩』が存在した可能性を論じる劉麗文・段露航

「清華簡《周公之琴舞》対《詩経》流伝与編定的啓示」などの論文計十篇が収録される。

『耆夜』に関しては、引用される『蟋蟀』の詩について、その中の「不喜不楽」における「不」を、否定副詞ではなく語助詞としてとらえ、解釈を試みる李均明「『蟋蟀』詩主旨辨」、『耆夜』の『蟋蟀』と『詩経』唐風の『蟋蟀』を比較し、それによって『耆夜』の成立時期について議論する李鋭「清華簡『耆夜』再探」など、論文計四篇が収録される。

これらの論文の内、特に「清華簡《周公之琴舞》対《詩経》流伝与編定的啓示」などの、先秦期の『詩』の伝承過程に関するものは、安大簡『詩経』という新たな材料を得て、再検討されるものであろう。

『楚簡与先秦《詩》学研究』（曹建国著、武漢大学出版社、二〇一〇年三月、全二九八頁、横組繁体字）

主に『孔子詩論』を利用して、先秦『詩』学の特徴と発展とを論じた研究書。緒論を含めて八章から構成される。

緒論「楚簡与先秦『詩』学研究」では、既出の阜陽漢簡『詩経』や、郭店簡といった資料、また『孔子詩論』に関しての各方面の研究の状況を簡潔に紹介する。

第一章「『孔子詩論』文字校釈与簡序編聯」では、先行研究で複数の意見がある箇所について、それらを取捨、あるいは新たに説を提出することで、筆者の『詩論』解釈における立場を明確にしている。

第二章「孔子与『孔子詩論』」では、『孔子詩論』が孔子の『詩』学思想を多く受け継いでいると述べ、それを孔子の『詩』学における『詩』観と、『孔子詩論』の記述が一致することなどから示す。また、孔子『詩』学には「情」を重んじる面が存在したことを指摘する。

第三章「子游学与『孔子詩論』関係考論」では、各種文献から子游学派の傾向を確認した上で、『孔子詩論』が「情」によって詩を論ずる点や、その他各種概念を子游学派と共有することから、『孔子詩論』は子游学派によって作られたと主張する。

第四章「『孔子詩論』論詩与漢代『詩』学比較」では、まず『詩大序』と『孔子詩論』とを比較し、その違いを『詩大序』には「正変」の理論の枠組みがあり、詩歌の政治的含意を強調するのに対して、『孔子詩論』は詩歌による修身を強調することであるとする。次に漢儒の説と『孔子詩論』の説とを比較し、それらが一致する場合もあることから、『詩序』の成立年代に疑問を呈する。

第五章「上博四逸詩『多薪』『交交鳴鳲』考論」では、これらを釈読した上で、そこに現れる事物が楚文化と関係が深いことから、これらを楚詩であるとする。また、これらの詩は『詩経』の詩を模倣したものであり、孔子により削除された部分ではないとする。

第六章「従出土楚簡看「詩言志」命題在先秦的発展」では、「志」が元来宗教的な、心の中での願いを指していたとした上で、これに基づいて「志」に関する問題を検討する。

第七章「先秦『詩』本与今伝『詩』本関係考論」では、『孔子詩論』と今本『詩経』との間に、逸詩の存在や詩篇の順序といった差異が見られることを指摘し、今本『詩経』が孔子の整理によるものであるという説を否定、その成立を漢初とする。

『孔子詩論述学』（劉信芳著、安徽大学出版社、二〇〇三年一月、全三二四頁、横組繁体字）

『孔子詩論』の総合的研究書。『詩論』に関する論考の上篇と、諸家の意見を纏めた『詩論』集注を主とする下篇から構成される。

上篇は六章で構成される。

「楚簡『詩論』所評風、雅、頌研究」では、まずその思想に儒家分派以降の背景が見られることを指摘し、続いて『孔子詩論』において整理者が第一部分とする箇所（詩序に相当）についての検討を行う。

「『詩論』所評『童而偕』之詩研究」では、関雎・樛木・漢広・鵲巣・甘棠・緑衣・燕燕の七篇に対する評語「童而偕」を、「幼いが他人と和睦する」の意味とし、その理解に基づき七篇の詩の評価を検討する。

「『詩論』所評詩歌表現手法研究」では、十月の評語に見える「譬」、小旻の評語に見える「擬」、関雎の評語に見える「諭」について検討する。

「以楚解『詩論』」では、中国思想のいくつかのキーワードに注目し、『詩論』の思想と他の楚簡文献（郭店簡）の思想とを比較することで、それらの共通性を論ずる。

「『詩論』考釈的意見分岐以及相関問題」は、『詩論』に限らず出土文献一般における整理作業の原則に対する意見である。

「『詩論』研究述評」では、「作者と篇題」「簡序と編聯」「留白簡」「『詩論』にて言及される『詩経』の篇名」「重要な字句の考釈」「『詩論』の学術的価値と研究展望」について、重要な先行研究を挙げつつ、現状を紹介する。

下篇は、諸家の意見を集め、最後に著者の意見を述べる、一般的な形式の集注となっている。

『上海博物館蔵戦国楚竹書《詩論》解義』（黄懐信著、社会科学文献出版社、二〇〇四年八月、全三二八頁、横組簡体字）

『孔子詩論』の注釈書。編聯や復原の問題に触れる冒頭部分と、巻末に収録された三篇の論考を除き、紙幅の大部分は注釈である。主な先行研究を挙げ、それに続いて著者の見解を述べるという、きわめて一般的な構成の注釈書であるが、その注釈は字句の解釈にとどまらず、広範に及ぶ。

本書の注釈の特徴は、著者自身も前言で述べるように、伝統的な解釈にとらわれない『詩経』本文の解釈に立脚した、『孔子詩論』の解読である。例えば『孔子詩論』第五章に「将大車之囂也、則以為不可如何也」とあり、この「囂」字に関して数々の意見が出ている。ここで著者は『詩経』無将大車の原文で、禁止命令の意味の「無（なかれ）」が六回も用いられていることに注目し、「囂」をその本義である「さわがしい」の意味で解釈するという見解を出している。

本書は『詩経』本文を重視した解釈を特徴とするため、『孔子詩論』に詩名が挙げられている場合には、その詩自体についての近代的解釈を提示したうえで『孔子詩論』の論評部分の解釈を行う。この『詩』解釈自体はあくまで著者のものであるので、本書を参照する際にはその点に注意が必要であろう。

『《孔子詩論》研究』（陳桐生著、中華書局、二〇〇四年十二月、全三四一頁、横組簡体字）

『孔子詩論』の成立や思想特徴を総合的に論じる研究書。付録として「孔

子詩論簡注」が含まれるものの、字句の解釈よりは文献自体の性質に対する考察が主である。

まず序に代えて、「従『孔子詩論』看戦国南楚『詩』学」の章では、『詩』を利用して自らの思想を主張する、『孟子』に代表される北方の詩学と比較して、『孔子詩論』の南方の詩学は、『詩』それ自体に立脚していることを指摘する。

続いて第一章「『孔子詩論』的作者与時代」では、伝世文献の記述との比較から、その作者を、心性説を論ずる子思派と関係を持つ、『詩三百』の専門の儒者であるとし、成書年代を子思より後かつ孟子より前と予想する。

第二章「『孔子詩論』学術思想考源」では、『孔子詩論』の思想の源流として、『性情論』や『性自命出』などに見られる子思学派の性情学と、それと結びついた礼学とを挙げる。また具体的な詩説については、他の典籍と一致するものもあることから、先行する詩説を吸収している部分も多いことを示す。

第三章「『孔子詩論』的理論創新」では、『孔子詩論』が断章取義から『詩』それ自体を論じる方向へと舵を切ったこと、頌・雅・風の分類の趣旨を論じたこと、性情学や礼学と詩を結び付け、理論化したことを記述する。

第四章「『孔子詩論』与漢代『詩』学」では、『詩』によって『詩』を説く南方詩学の作品である『孔子詩論』が、荀子を経由して、南北詩学の融合である漢代の詩学に影響を与えたことを説く。

本書については、上野洋子氏による詳細な書評が、『中国研究集刊』第三十八号にあるため、そちらも参照されたい。

『戦国文字研究』第一輯（徐在国主編、安徽大学漢字発展与応用研究中心編、安徽大学出版社、二〇一九年九月、全一九九頁、横組繁体字）

安大簡『詩経』の内容を踏まえた論文が多く含まれる論文集。全二十三篇の論文の内、六篇が安大簡を資料とした論文である。

徐在国「拠安大簡考釈銅器銘文一則」は、西周期の青銅器銘文に見られる「不（丕）杯」という語句について、従来の「丕顕」或いは「丕丕」と読む解釈を退け、安大簡で「杯」が『毛詩』の「副」字に対応することにより、「不（丕）杯」における「杯」字も、「不」声の字と考え、「副（福）」と解釈する。これにより、「不（丕）杯」を「大きな福」という意味に解釈する。

郝士宏「従安大簡看『詩経』「采采」一詞的訓詁」は、まず『詩経』で度々用いられる「采采」という語について、これを動詞「采」の重複ととる解釈と、草の茂る様子を表す語であるという解釈があることを説明する。続いて安大簡『詩経』においては、「とる」という動詞の場合にはすべて「采」字が用いられる一方、毛詩の「采采」はその多くが「菜菜」と草冠を付して書かれることから、これら二つの間には文字表記上の区別があったとし、「采采」はやはり動詞の重複形式ではないとする。

程燕「由安大簡『君子偕老』談起」は、『毛詩』において、君子偕老が七句・九句・八句の三章から構成され、非常に歪な構造をしている原因を、安大簡から推測する。安大簡の君子偕老の、第二章の第一字が字形上、重文符号を含むように伝承の過程で誤解され、そこからの連鎖反応により、第二章で二句、第三章で一句の増加が起こり、現在の『毛詩』の形に至ったとする。また、魏風葛屨及び唐風揚之水においても、本来整った構造であったことを示す根拠が安大簡に残ることを指摘する。

劉剛「『詩・揚之水』「卒章四言」新証」は、まず『左伝』定公十年にある「『揚水』卒章之四言」という記述について、「四言」を四字と解釈し、唐風揚之水の卒章の「我聞有命」を指すという解釈を、先秦時代においては「言」を「字」ではなく「句」と解釈すべきとして退ける。そのうえで、安大簡では同詩の卒章が二句増え、三章にわたって繰り返される「揚之水、白石〇〇」の二句を除けば、「我聞有命、不敢以告人。如以告人、害于躬身」の四句（＝四言）となることを考え、またこれが『左伝』の状況とも符合することを指摘する。

李鵬輝「談安大簡『詩経』中的「褭」及其相関字」は、戦国文字の「褭」「裹」「褭」といった字が、字形上の区別を有しつつもいずれも同じ語を表すものであることを示したうえで、秦漢以降の「褭」字は、戦国の「褭」字と字形を同じくするのみで、その意味は全く異なることを論証する。また、安大簡で用いられる「褭」字は、「傷懐」すなわち傷心の意味であることを示す。

夏大兆「安大簡『詩経』侯六続考」は、著者の『安大簡「詩経」侯六考』において、「侯」は晋国の詩であるとし、安大簡『詩経』の底本は晋国のものであり、楚人がこれを筆写したという見方をもとに、その根拠を補足する。

【附記】

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）JP19J10503 による成果の一部である。

鳥羽 加寿也（とば・かずや）

一九九三年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員（ＤＣ２）。専門は漢語音韻学。共著に『中国思想基本用語集』（湯浅邦弘編著、ミネルヴァ書房、二〇二〇年三月）、主要論文に「上古漢語の声調における地域時代差――特に去声と入声の分類について」（『中国研究集刊』第六十五号、二〇一九年六月）など。